



あなたにぴったりの湿地は

の<sup>つけ</sup>  
野付半島・野付湾



こんなところ ↓

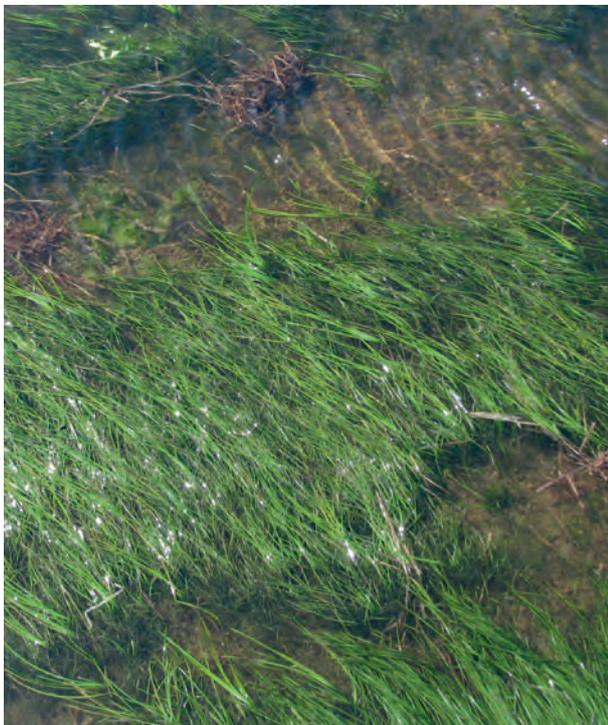
# 野付半島・野付湾



石下 亜衣紗 (野付半島ネイチャーセンター)

野付半島は北海道東部、知床半島と根室半島  
の間に位置し、オホーツク海へ突き出た全長約  
26 km の日本最大の砂嘴である。約 4,000 年前か  
ら、海流が知床半島や標津町から砂や小石を運び、  
釣り針のような、エビが背を丸めたような独特な形  
に堆積した。この細長い半島とそれに囲まれた野  
付湾には海岸草原、塩性湿地、森林など様々な自  
然環境があり、植物 300 種類以上、野鳥 260 種  
以上と多くの生きものが暮らし、独特の景色を作り  
上げ、人々の生活にも結び付いている。

野付湾は日本有数の藻場としても知られ、面積  
の約 70% にアマモが生い茂る。アマモは「海の  
ゆりかご」とも呼ばれ、海にすむ生きものたちのす  
みか・隠れ家、産卵場所となり、湾内の生態系・  
海産物を支える重要な植物である。



「海のゆりかご」アマモ

野付の豊富な生きものと海産物を支える重要な植物



明治時代から続く伝統漁の打瀬舟

北海道遺産にも選定され、アマモを必要以上に傷つけない  
漁法が守られている

野付の海産物、アマモの中にすむ生きものとい  
えば特に「北海しまえび」(ホッカイエビ)が有名  
である。野付湾では、このエビを獲るために、明  
治時代から「打瀬舟」が用いられてきた(→p.96)。  
三角形の3枚帆に風を受け、それを推進力に網を  
曳き、豊富に生えるアマモを撫でるようにエビを獲  
ることで、必要以上にアマモを傷つけないように、  
資源が枯渇することのないように利用し続けている  
のである。抜け落ち、海岸に打ち寄せられたアマ  
モの中には、小さなトビムシがすみ、それがシギ・  
チドリの間際の食料となる。このように渡りをする  
水鳥達にとってアマモ場である野付湾は重要な中  
継地となっており、ラムサール条約の他にも、東ア  
ジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナ  
シップにも登録されている。



野付を代表するトドワラの景色

年々枯れ木が減少していき、いずれはなくなってしまう

一方、観光地としても知られており、海水の侵入によって立ち枯れた木々が並ぶトドワラやナラワラの特異な景色が知られている。かつては白い骨のような枯れ木が一面に立ち並び、この世の終わり、動物の墓場などと例えられた。この枯れ木群は年々風化し、今では枯れ木が残り少なくなっており、いずれは見られなくなっていく。



冬季には湾が凍結する

一面の「何も無い景色」を楽しむ冬のガイドツアーが人気



夏の原生花園

半島全体に6月から10月にかけて様々な花が絨毯を作りあげる

春から秋にかけては原生花園の花々が次々と咲き変わり、季節ごとにいろいろな色を楽しめる。花の最盛期6月中旬からセンダイハギの黄色、エゾカンゾウ（ゼンテイカ）のオレンジ色、ハマナスのピンク、ノハナショウブの紫色と花の絨毯が日ごとに衣替えしていく光景は実に見事である。秋には薄紫色のウラギクやアッケシソウの紅葉が塩性湿地を

彩る。観光船に乗ると湾内でゴロゴロと昼寝をするゴマフアザラシの姿に癒される。厳冬期には野付湾は凍り付き、一面の「水平線」が現れる。まっさらな氷の上を歩き、不思議なトリック写真を楽しむガイドツアーがここ数年の冬の楽しみ方でもある。道東域独特の冬の伝統漁、氷下待ち網漁（→p.96）に集まり、厳冬期を生き抜くオオワシ・オジロワシ（→p.31）の雄大な姿。光の屈折により稀に「四角い朝陽」の神秘的な光景も見られる。このような独特な自然とそこに暮らす生きもの、人々が作り上げる光景が野付の魅力なのである。



高層湿原